

泉沢A遺跡

—農道片子沢線改良工事に伴う発掘調査報告書—



平成18年3月

宮城県栗原市教育委員会
宮城県栗原市産業経済部
宮城県栗原市栗駒総合支所

泉沢A遺跡

—農道片子沢線改良工事に伴う発掘調査報告書—

平成18年3月

宮城県栗原市教育委員会
宮城県栗原市産業経済部
宮城県栗原市栗駒総合支所

序 文

本書は栗原市栗駒地区に位置する泉沢A遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

農道片子沢線改良工事は旧栗駒町で計画をし、泉沢A遺跡がかかわりを持つことがわかりました。平成16年度に栗駒町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当となり確認調査を実施しました。そして、栗原郡10町村が合併を行い、栗原市が誕生した平成17年度に栗原市教育委員会が主体となり、発掘調査を実施しました。その成果につきましては本書に譲りますが、栗原市を代表する遺跡のひとつである国史跡伊治城跡が存続した時代と同時期に営まれた時期もある遺跡と考えることができ、古代栗原郡を考える上で重要な成果を得ることができたものと考えております。

さて、栗原市が誕生してまもなく1年が過ぎようとしています。栗原市内の文化財の保護には地域の皆様の協力が不可欠です。合併する以前と同様、文化財の保護にご協力いただきますようお願い申し上げます。

最後に調査を進めるにあたり、ご指導、ご協力をいただきました宮城県教育庁文化財保護課の皆様、栗駒おろしの風雪の中作業にあたられた作業員の皆様、そして種々ご協力をいただきました泉沢地区、渡丸地区の皆様に感謝申し上げ発刊のあいさつといたします。

平成18年3月

栗原市教育委員会教育長 佐藤光平

目 次

序 文

目 次

例 言

I.	遺跡の位置と地理的、歴史的環境	1
II.	調査にいたる経緯と調査方法	5
III.	基本層序	9
IV.	検出した遺構と遺物	9
	1. 竪穴遺構と出土遺物	
	2. 建物跡と出土遺物	
	3. 土坑と出土遺物	
	4. 溝跡と出土遺物	
	5. 遺構外出土遺物	
V.	考察	17
	1. 出土遺物について	
	2. 遺構について	
	3. 遺跡の性格について	
VI.	まとめ	23
	附章. 泉沢B遺跡及び長者原遺跡から採集した遺物について	24

図 目 次

第1図 栗原市の位置	第10図 5号土坑断面
第2図 泉沢A遺跡と周辺の遺跡	第11図 6号溝跡断面
第3図 調査区の位置	第12図 遺構外出土遺物
第4図 調査区全体図	第13図 伊治城跡出土の軒平瓦（松森コレクション）
第5図 1号竪穴遺構と出土遺物	第14図 4号土坑と類例
第6図 2号建物跡	第15図 泉沢A遺跡と周辺の遺跡
第7図 3号建物跡	第16図 泉沢B遺跡採集遺物
第8図 4号土坑・7号溝跡	第17図 長者原遺跡出土遺物
第9図 4号土坑・7号溝跡出土遺物	

表 目 次

第1表 遺跡地名表

第2表 4号土坑・7号溝跡出土遺物観察表

第3表 泉沢A遺跡及び泉沢B遺跡出土遺物の海綿骨針

を含む比率

図 版 目 次

図版1 泉沢A遺跡付近の空中写真

図版2 調査区東側、東より

調査区西側、西より

調査区中央付近、東より

図版3 1号竪穴造構断面、南より

1号竪穴造構床面確認状況、西より

1号竪穴造構掘り方除去状況、西より

図版4 2号建物跡、北より

2号建物跡P2断面、西より

2号建物跡P5完掘状況、東より

図版5 3号建物跡、北より

3号建物跡P8断面、西より

4号土坑・7号溝跡、南より

図版6 5号土坑断面、西より

5号土坑完掘状況、南西より

6号溝跡断面、北より

図版7 出土遺物

例 言

1. 本書は片子沢地区基盤整備促進事業（農道片子沢線改良工事）に伴う泉沢A遺跡の発掘調査報告書と栗原市栗駒泉沢地内（泉沢B遺跡及び長者原遺跡）で採集された遺物の資料報告である。
2. 栗駒町を含む栗原郡10町村は平成17年4月1日に合併し、栗原市となった。
3. 発掘調査から報告書作成にいたる一連の作業は、調査原因となった開発行為の事業主である栗原市産業経済部（担当 栗原市栗駒総合支所産業建設課）の依頼を受けて、栗原市教育委員会が行ったものである。
4. 調査は次の要項で実施した。

遺跡名 泉沢A遺跡（遺跡登録番号43014）

所在地 栗原市栗駒泉沢谷地田地内

調査面積 645m²

調査期間 確認調査 平成16年11月10日

事前調査 平成17年10月31日～12月22日

調査主体 確認調査 栗駒町教育委員会教育長 佐藤光平

事前調査 栗原市教育委員会教育長 佐藤光平

調査担当 確認調査 村田晃一・白崎恵介（宮城県教育庁文化財保護課）

事前調査 千葉長彦・安達訓仁（栗原市教育委員会文化財保護課）

調査指導 宮城県教育庁文化財保護課

調査協力 栗駒泉沢地区 栗駒渡丸地区 栗原市栗駒総合支所産業建設課 （有）鈴紅土建

発掘調査参加者 佐藤トキエ 岩淵義勝 岩淵たか 小宮山義夫 佐藤芳子 斎藤やす子 佐藤正司

佐藤いわ子

整理作業参加者 芳賀雅子 星宗久美子 兵藤牧子 鈴木浩枝 鎌田うめよ

5. 遺構番号は通し番号を各遺構に付した。

6. 土層や土器の色調表現は『新編標準土色帳(20版)』（小山・竹原編1997、株日本色研事業）に準拠し、土性区分については国際土壤学会に準拠している。

7. 図中にある方位は真北を表している。

8. 調査区全体図は1/200、遺構の縮尺は1/60、建物跡は1/100、建物模式図は1/150を基本とし、遺構断面図は1/60に統一し、スケールを添えた。また、遺物は1/3を基本とした。須恵器は断面黒塗りとしている。

9. 遺物写真的縮尺は任意である。

10. 第2図は国土地理院作成1/50,000「岩ヶ崎」と「金成」、第17図は旧栗駒町作成1/10,000、図版1は国土地理院撮影空中写真 (TO-62-6X C3-10) を複製し用いた。

11. 発掘調査及び報告書作成に際し、次の方々よりご指導、御助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

真山 悟、後藤秀一、佐藤則之、須田良平、佐藤憲幸、村田晃一（宮城県教育庁文化財保護課）、

佐藤信行（日本考古学協会会員）、佐藤敏幸（東松島市教育委員会）、車田 敦（田尻町教育委員会）

12. 調査によって得られた資料は、全て栗原市教育委員会（栗原市築館文化財管理センター）で保管している。

13. 本書の執筆、編集は課員の協議を経て安達が行った。

I. 遺跡の位置と地理的、歴史的環境

宮城県北西部に位置する栗原市は岩手、秋田両県と接している。栗駒地区はその中でも北西隅に所在し、宮城県北部を南北に貫く奥羽山脈と岩手県から宮城県北東部にかけて伸びる北上山地に挟まれた北上川沿岸低地（仙北平野低地）のうち、北上川流域右岸の一画に位置している。



第1図 栗原市の位置

ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら緩やかな起伏をもって南東方向に連なる派生丘陵のほぼ末端部にあたり、標高約20～60mのなだらかな丘陵地帯や河岸段丘を形成している。奥羽山脈に源を発する一迫川、二迫川、三迫川などにより複雑に開析されて樹枝状となった幅の広い谷底平野やその麓には低地（後背湿地や自然堤防）が広がる（註1）。

泉沢A遺跡はこの丘陵地帯のうち東側に伸びる小丘陵上、標高約28～35mの地点に立地している。

本遺跡の周辺には縄文時代から中・近世にいたるまでの遺跡が多数分布する。これらの多くは一迫川や二迫川などの河川流域の丘陵や段丘上に認められる。

縄文時代の遺跡としては、落とし穴遺構が多数確認された長者原遺跡（註2）や有賀沢遺跡（晚期）、すぐ南側の丘陵では堀切長根遺跡、二迫川を挟んだ対岸の丘陵上に新山神社跡遺跡、陣場遺跡（中期、土偶）が所在する。弥生時代の遺跡には清水田遺跡で大泉式、伊治城跡で天王山式が出土している。

古墳時代の遺跡には、前期の豪族居館が発見されている伊治城跡（註3）がある。この居館を区画する溝からは塙釜式土器と北大式土器が共伴して出土しており、統繩文化との接触のあり方が注目される。中期の遺跡には竪穴住居跡が発見された長者原遺跡がある。精査を行った竪穴住居跡5棟からは南小泉式土器が出土するとともに、住居の周辺からは有孔円板、劍形、曲玉形の石製模造品がまとめて出土している地点もある（註4）。さらに築館地区留場では円筒埴輪の破片が採集されている（註5）。これまで調査が行われた墳墓には伊治城跡で確認された円形周溝がある。伊治城では発掘調査により円形周溝13基が確認されており、主体部が残存しているものもある。これらの年代は塙釜式の土器細片が出土するのみであるため明確ではないが、伊治城存続期よりも古いものである（註6）。

古代になると遺跡数は増加し、丘陵や段丘上に多数確認されるようになる。本遺跡の南東約2.5kmには国史跡伊治城跡が所在する。昭和52年度から3年間にわたり宮城県多賀城跡研究所、昭和62年度から築館町教育委員会（平成17年度より栗原市教育委員会）、宮城県教育委員会により継続的に発掘調査が行われている。『続日本紀』にみえる神護景雲元年（767）に律令政府が東北經營のため設置した城柵の一つであり、宝亀11年（780）に伊治公咎麻呂により按察使紀広純、牡鹿郡大領道嶋大権が殺害されるという事件が行った「伊治城」であり、政府、内郭、外郭の三重構造をもつことが判明している（註7）。これまで発掘調査がおこなわれた集落には長者原遺跡（栗駒地区）、木戸遺跡（註8）、佐内屋敷遺跡（註9）、原田遺跡（註10）、下萩沢遺跡（註11）、鰐沢遺跡（註12）、嘉倉貝塚（註13）（以上築館地区）、

I. 遺跡の位置と地理的、歴史的環境

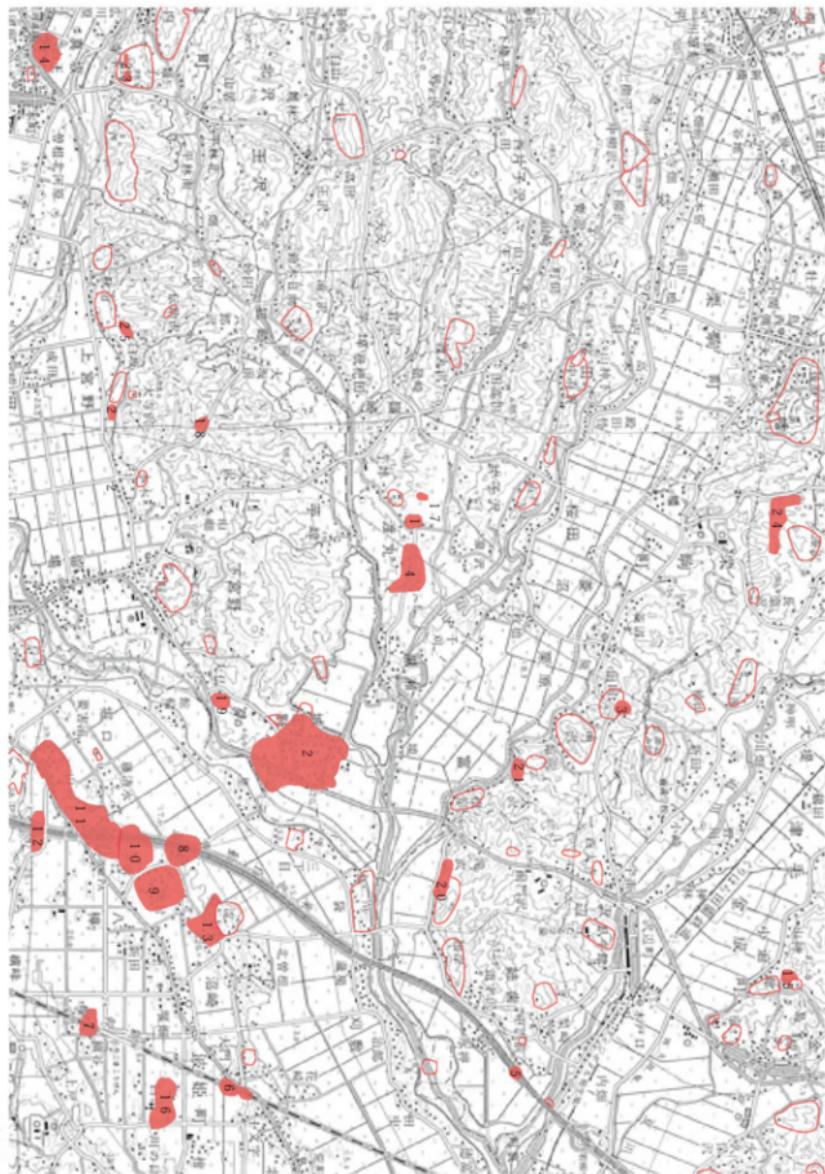
御駒堂遺跡（註15）、山ノ上遺跡（註16）、宇南遺跡（註17）、鶴ノ丸遺跡（註18）、吹付遺跡（註19）、淀遺跡（註20）、糠塚遺跡（註21）、大門遺跡（註22）、（以上志波姫地区）、佐野遺跡（註23）（金成地区）、有賀峰遺跡（註24）（若柳地区）などがある。このうち御駒堂遺跡、山ノ上遺跡では7世紀後半から8世紀前半にかけて関東からの人々の交流や移住を想定させる関東系土師器（註25）や住居構造が確認されており、伊治城成立以前の栗原地方の状況を考える上で貴重である。伊治城が設置された8世紀後半以降になると確認できる集落数は大きく増加する。これらの集落は竪穴住居跡を主体としている。一方、原田遺跡、下萩沢遺跡では伊治城存続期と同時期の掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見され、溝や材木軸により集落の周囲をめぐらせていた可能性が指摘されるとともに建物の方向を描え計画的に配置された建物群がある。また、吹付遺跡においても掘立柱建物跡が確認されている。これらは、他の集落とは異なる様相を持つことから伊治城跡とのかかわりが考えられている。特筆できる古代の遺物としては沢辺内畠（金成地区）で出土した人面が墨書きされた土師器甕（註26）がある。生産遺跡には須恵器を焼成していた岩ノ沢窯跡（築館地区）や孤塚遺跡（志波姫地区）（註27）、須恵器と瓦を焼成していた小迫神社窯跡（金成地区）（註28）があり、後2者の製品が伊治城に供給されたものと考えられている。このほか詳細は不明であるが三沢窯跡（金成地区）（註29）がある。これまで調査が行われた墳墓には二迫川対岸にある北側の丘陵上に位置する鳥矢ヶ崎古墳群がある。33基からなる鳥矢ヶ崎古墳群は2基の発掘調査が行われており青銅製の鎔帶金具一式や蕨手刀が発見されている（註30）。鎔帶金具がほぼそろった状況で確認されており、律令政府とのかかわりを示すものとして特筆できる。二迫川対岸にある北側丘陵南斜面では大沢横穴墓群や姉歯横穴墓群（註31）などが確認されており、内陸部における横穴墓の北限線とされている。これらの墳墓や横穴の年代は8世紀代と考えられている。なお、7～10世紀の周辺の考古学からみた歴史的な環境については『伊治城跡 嘉倉貝塚』（註32）に詳しいので参照願いたい。古代末期の遺跡を確認した例は少ないが、井戸跡から手づくねかわらけや青磁が出土した伊治城跡（註33）、L字形にめぐる溝跡から手づくねかわらけが1点出土した長者原遺跡（註34）、礎石建物や池跡が確認された花山寺跡（註35）と花山寺経塚群（花山地区）（註36）などがある。また、本遺跡の北方3kmには『吾妻鏡』にみえる栗原寺跡と推定されている地点があり、古代末の遺構や遺物は未発見ながら10世紀前半頃の池跡（註37）や平安時代中期以降の礎石建物跡が発見されており、付近の「仁王田」などからは仏像も発見されている（註38）。

中世の遺跡としては長者原遺跡で昭和41年（1966）の開田作業中に多量の古銭（56銭種、4,325枚、最新銭種「至大通宝」）が発見されている（註39）。このほか岩ヶ崎地区や鳥矢ヶ崎地区の丘陵上を中心に黒岩館跡、鶴丸館跡（註40）、八幡館跡（註41）、臥牛館跡、猿飛來館跡、三玉城跡、長網沢館跡、長者原館跡など多数の城館跡が確認されている。この地が旧上街道沿いにあたり、交通上要衝の地であったことも数多くの館跡が確認できる要因の一つであろう。

註

- 註1 宮城県企画部土地対策課1986『土地分類基本調査 若柳・一関』。註2 栗駒町教育委員会1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集。註3 築館町教育委員会1990、1992、1998『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第3、5、11集。註4 註2と同じ。註5 築館町史編纂委員会1976「古墳時代中期の文化」『築館町史』、174～177頁。註6 築館町教育委員会1989～1995『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第2～8集。註7 宮城県多賀城跡調査研究所1978～1980『伊治城跡Ⅰ～Ⅲ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第3～5冊、築館町教育委員会1990～2005『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第1～15、17、19集。註8 註2と同じ。註9 宮城県教育委員会1980『木戸遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集。註10 宮城県教育委員会1980『佐内屋敷遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第93集。註11 宮城県教育委員会1980『原田遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集、宮城県教育委員会2004『築館町下萩沢遺跡 原田遺跡 現地説明会資料』、宮城県教育委員会2005『下萩沢遺跡・原田遺跡の調査成果の概要』『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』、287～292頁。註12 宮城県教育委員会2004『築館町下萩沢遺跡 原田遺跡 現地説明会資料』、宮城県教育委員会2005『下萩沢遺跡・原田遺跡の調査成果の概要』『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』、287～292頁。註13 築館町教育委員会2005『鰐沢遺跡』築館町文化財調査報告書第18集。註14 宮城県教育委員会2002『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集、築館町教育委員会2002『嘉倉貝塚』『伊治城跡・嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第15集、築館町教育委員会2003『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第16集。註15 宮城県教育委員会1982『御駒堂遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第83集、志波姫町教育委員会2005『御駒堂遺跡』志波姫町文化財調査報告書第1集。註16 宮城県教育委員会1980『山ノ上遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集。註17 宮城県教育委員会1979『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集、宮城県教育委員会1980『宇南遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集。註18 宮城県教育委員会1981『鶴ノ丸遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集。註19 宮城県教育委員会2005『吹付遺跡』『壇の腰遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第202集。註20 宮城県教育委員会2001『淀遺跡』『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第187集。註21 宮城県教育委員会1978『糠塚遺跡』『宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)』宮城県文化財調査報告書第53集。註22 宮城県教育委員会1980『大門遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書2』宮城県文化財調査報告書第62集。註23 宮城県教育委員会1980『左野遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第63集。註24 宮城県教育委員会1980『有賀峰遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集。註25 村田晃一2000『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－』『宮城考古学』第2集、45～80頁。註26 加藤孝1976『東北地方出土の人面墨書き土器』『柏倉亮吉教授還暦記念論文集 山形県の考古と歴史』、89～98頁と金成町史編纂委員会2002『第2編 通史』『金成町史増補版』、160～162頁。註27 築館町史編さん委員会1976『栗原郡内の生産遺跡』『築館町史』、232～234頁と図版3 志波姫町狐塚遺跡出土の須恵器、265頁、志波姫町史編纂委員会1976『奈良時代』及び『名所・旧蹟』『志波姫町史』、127～128頁及び760～763頁。註28 築館町教育委員会1994『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第7集、37～38頁。註29 古窯跡研究会1976『宮城県に於ける窯跡の分布と問題点』『陸奥国官窯跡群Ⅱ』 古窯跡研究会研究報告第4冊、91～92頁。註30 栗駒町教育委員会1972『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢崎古墳調査概報』。註31 註5と同じ。註32 築館町教育委員会2002『伊治城跡・嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第15集、2～5頁。註33 築館町教育委員会1993『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第6集。註34 註2と同じ。註35 花山村教育委員会1980『花山寺跡』花山村文化財調査報告書第1集、宮城県教育委員会1990『花山寺跡』『大貫館山館跡ほか』宮城県文化財調査報告書第137集。註36 宮城県教育委員会1989『花山寺経塚群』『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第131集。註37 宮城県教育委員会1996『栗原寺跡』『下草古墳跡ほか』宮城県文化財調査報告書第169集。註38 栗原寺調査団1963『栗原寺の諸問題－栗原寺調査中間報告－』『栗駒町史』、1135～1147頁。註39 藤沼邦彦・神宮寺千恵1992『宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心として－』『東北歴史資料館研究紀要』第18巻。註40 栗駒町教育委員会1978『鶴丸館跡』栗駒町文化財調査報告書第2集。註41 室野秀文2004『屯ヶ岡の遭構』第27回蝦夷研究会発表資料

1. 遺跡の位置と地理的、歴史的環境



第2図 泉沢A遺跡と周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	泉沢A遺跡	散布地	古代	14	山王岡遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
2	伊治城跡	古墳・居館・集落・城櫓	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	15	小追神社窯跡	窯跡	奈良
3	栗原寺跡	散布地・寺院	古代・中世	16	狐塚遺跡	窯跡	古代
4	長者原遺跡	集落	古墳前・中・奈良・平安	17	泉沢B遺跡	窯跡?・散布地	古代
5	佐野遺跡	集落	弥生・古代	18	岩ノ沢窯跡	窯跡	古代
6	大門遺跡	集落	繩文・奈良・平安・中世	19	大仏古墳群	円墳	古墳前・後・古代
7	熊谷遺跡	集落	繩文・古代	20	姉歛横穴墓群	横穴墓	古墳後
8	鶴ノ丸遺跡	城館・集落	繩文・晩・弥生～近世	21	大沢横穴墓群	横穴墓	古墳後・古代
9	吹付遺跡	集落	古代・中世	22	小館山横穴墓群	横穴墓	古墳後・古代
10	宇南遺跡	集落・城館	繩文前・晩・弥生～近世	23	西沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
11	御駒堂遺跡	集落	繩文・弥生・古墳～近世	24	鳥ヶ崎古墳群	円墳	古墳後・古代
12	山ノ上遺跡	集落	繩文・古代	25	御幣所森古墳群	円墳	古墳後・古代
13	淀遺跡	散布地・集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世				

第1表 遺跡地名表

II. 調査にいたる経緯と調査方法

泉沢A遺跡は栗原市栗駒泉沢谷地田地内に位置している。古代の散布地として登録されているが、これまで本格的な発掘調査は実施されておらず、詳細が不明であった。

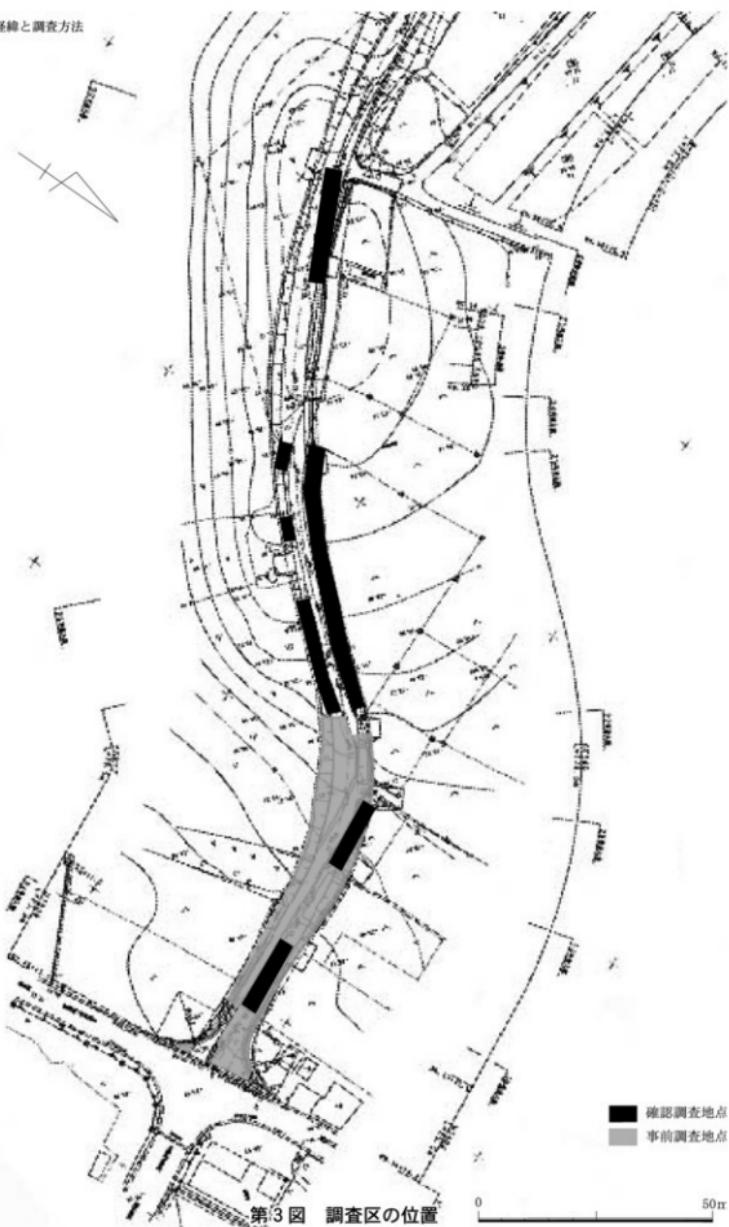
平成15年9月30日、栗駒町農林課より農道片子沢線改良工事計画の協議書が提出された。10月、宮城県教育庁文化財保護課、栗駒町教育委員会、栗駒町農林課により現地踏査が行われた。その結果、平成15年11月6日付けで周知の埋蔵文化財包蔵地である泉沢A遺跡内であり、遺跡周辺の畑地に土師器や須恵器が散布することから確認調査を行う必要があり、また、北西側の山林部分については現在埋蔵文化財包蔵地ではないが、平坦で緩やかな地形であるので伐採後、確認が必要であるとの回答がなされた。また、平成16年3月31日付けで埋蔵文化財発掘通知が提出された。

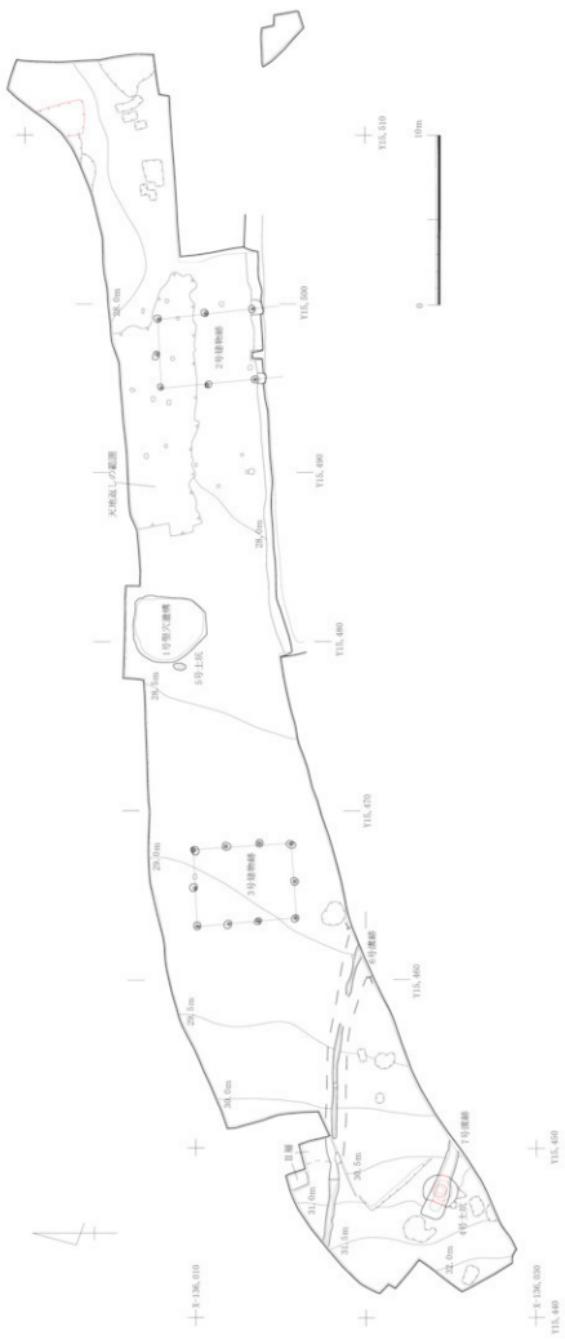
その後、協議が行われ、栗駒町教育委員会が主体となり宮城県教育庁文化財保護課が担当し確認調査を行うこととなり、平成16年11月10日に実施された。農道脇に調査区を4ヶ所設定し重機により掘り下げを行った。その結果、柱穴やピットを検出し、須恵器などが出土した。これらの分布は標高32m前後を境とし、東側の標高の低い部分に限られることが判明したことから、この付近について事前調査を実施することとなった。

事前調査は栗原市教育委員会が担当することとなり、平成17年10月28日にプレハブを設置し、器材を栗原市築館出土文化財管理センター及び瀬峰教育センターより搬入し、10月31日より重機を用い表土除去を開始、11月1日より人力で遺構検出作業を開始した。農道脇の拡幅部分に調査区を設定し遺構検出作業を行ったが、農道下に遺構が延びることが判明したため、11月15日と11月30日に現道撤去を行い、調査区を拡張した。その結果、竪穴遺構1基、掘立柱建物跡2棟、土坑2基、溝跡2条を確認した。特に建物跡は北側梁行がそろう状況を確認できた。その後精査を行い、12月9日に調査区全体の写真撮影を行った。記録は遺構の平面図、断面図を1/20、遺構のない部分や溝跡は1/50で平面図を作成し、写真記録は35mmデジタルカメラ(800万画素)で行った。これらの記録を12月16日まで作成し、12月22日に埋め戻しなどを行うと共に器材を搬出し、野外調査を終了した。

整理作業は野外調査実施中より遺物の水洗いを開始し、遺物調書の作成、遺構台帳の作成（1月13

II. 調査にいたる経緯と調査方法





第4回 調査区全体図

日まで）、その後接合作業、復元作業、遺物実測作成やトレース、報告書本文の執筆や各種の整理作業を3月20日まで行い、3月24日に全ての事業を終了した。

III. 基本層序

確認した基本層は次のとおりである。

- I層 灰黄褐色（10YR4/2）粘土。畠地側で確認できる耕作土。山林となっている南側では暗褐色（10YR3/3）シルトでしまりがなく、バサバサしている。木の根を多く含んでいる。調査区内での表土である。
- II層 黒色（10YR2/1）粘土で工事用杭K46付近より東側で約20～40cm残存する旧表土。
- III層 にぶい黄橙色（10YR7/3）砂質粘土～にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土。本調査区内での地山である（IIIa層）。地山面では風倒木痕（小礫を多数含む）を多数確認している。なお、4号土坑壁面を観察すると下部にはバミス層（小礫を多数含む、IIIb層）、にぶい黄橙色（10YR6/4）粘土（IIIc層）が確認できる。

IV. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は竪穴遺構1基、建物跡2棟、土坑2基、溝跡2条である。遺構より須恵器、土師器、瓦、表土より須恵器、土師器が出土した。

1. 竪穴遺構と出土遺物

1号竪穴遺構

【位置】調査区中央付近の平坦面に位置する。

【確認面】III層上面。断面で確認するとII層上面より掘り込まれている。

【重複】なし。

【規模】南北4.4m、東西4.0m。

【平面形】楕円形。

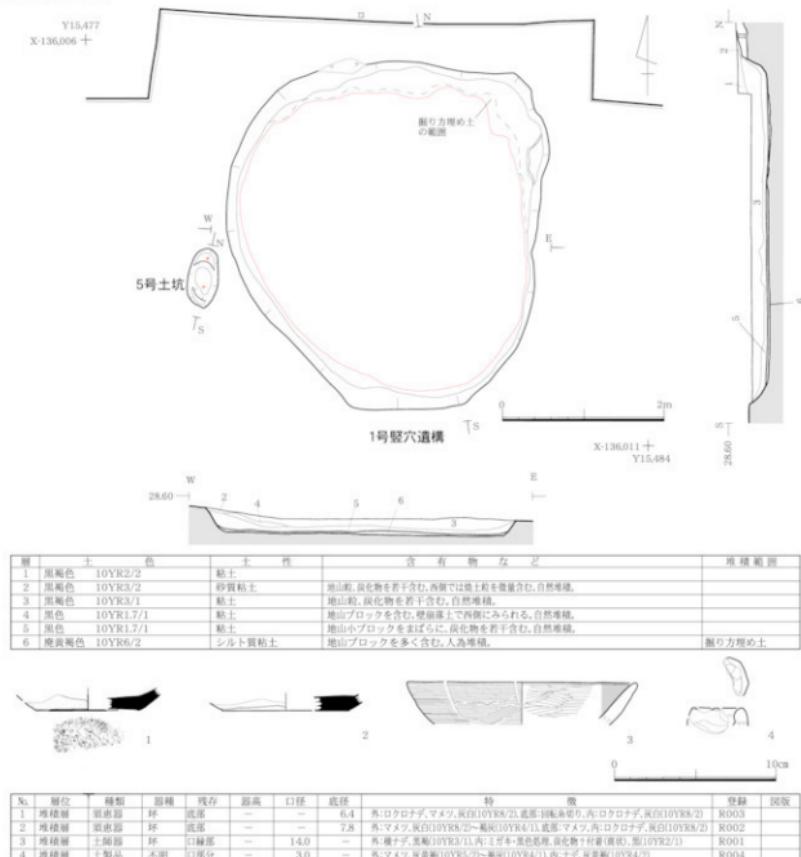
【層位】黒褐色～黒色粘土。全体に炭化物粒、炭化物片をまばらに、西側上層では焼土粒を若干含む。自然堆積。

【壁】III層。最大26cm残存。東辺中央及び西辺中央から北側、北辺では急に、南側ではゆるやかに立ち上がる。

【床面】掘り方埋め土を床とする。床面はほぼ平坦。層厚1～4cm。地山土を多く含む灰黄褐色シルト質粘土。掘り方底面はIII層からなり西側から東側にわずかに傾斜する。

【出土遺物】堆積層より土師器壺（非口クロと口クロか、内黒）、鉢（口クロか、内面ミガキ）、甕（非口クロ）、須恵器壺、壺、土製品の破片が出土した。土師器甕は内外面がハケメ調整される。須恵器壺の底部は回転糸切りによるものと摩滅により不明なものがある。

IV. 検出した遺構と遺物



第5図 1号竪穴遺構と出土遺物

2. 建物跡と出土遺物

2号建物跡

[位 置] 調査区東側の平坦面に位置する。

[確認面] III層上面。

[重複] なし。

[構造・方向] 据立式。南北棟。

[規模] 枠行2間以上(5.5m以上)、梁行2間(4.1m)。

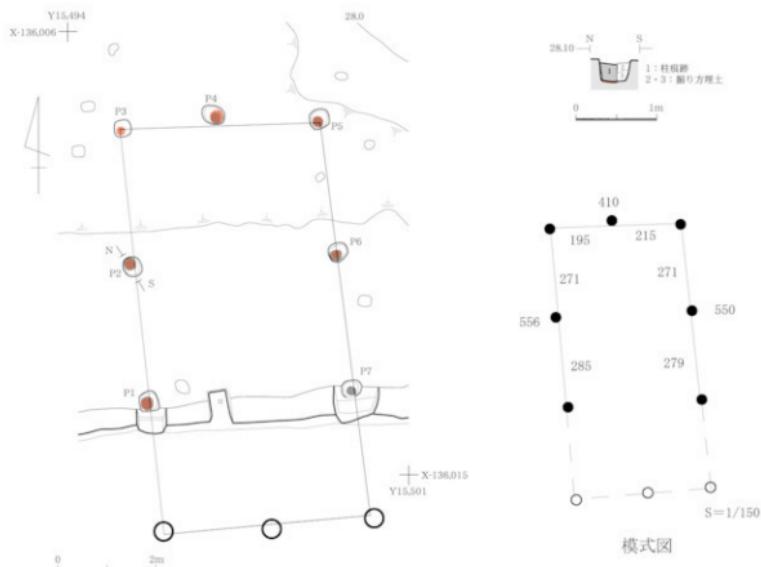
[方位] N-5°-W(西側柱列)。

[延べ床面積] 22.6m²以上。

【柱穴掘り方】 平面形：隅丸方形～円形。埋土：黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土。

【柱痕跡】 平面形：円形～楕円形。堆積土：黒褐色粘土で炭化物粒を若干含む。柱穴底面の柱痕跡部分は変色している。

【出土遺物】 なし。



模式図

No.	柱 穴	規格(南北、東西)	深さ	柱 痕	規格(南北、東西)	深さ	変色	その他	標高
P1	平面形 隅丸方形	0.41, 0.39	0.25	円 形	0.24, 0.22	0.25	○		27.84 27.59
P2	円 形	0.42, 0.44	0.29	円 形	0.24, 0.24	0.29	○		27.98 27.69
P3	隅丸方形	0.34, 0.38	0.04	円 形	(0.18, 0.20)	—	○	数値は変色部分	27.84 27.80
P4	隅丸方形	0.38, 0.48	0.26	円 形	0.24, 0.21	0.26	○		27.86 27.60
P5	円 形	0.44, 0.40	0.14	円 形	0.20, 0.20	0.14	○		27.80 27.66
P6	隅丸方形	0.37, 0.43	0.23	橢円形	0.25, 0.23	0.24	○		27.96 27.69
P7	隅丸方形	(0.34), 0.42	0.26	橢円形	0.17, 0.20	0.19	×	炭化物若干含む	27.79 27.53

柱穴属性表

第6図 2号建物跡

3号建物跡

【位置】 調査区中央西側の平坦面に位置する。

【確認面】 III層上面。

【重複】 なし。

【構造・方向】 掘立式。南北棟。

【規模】 衍行3間（5.8m）、梁行2間（4.55m）。

【方位】 N-5° - W（西側柱列）

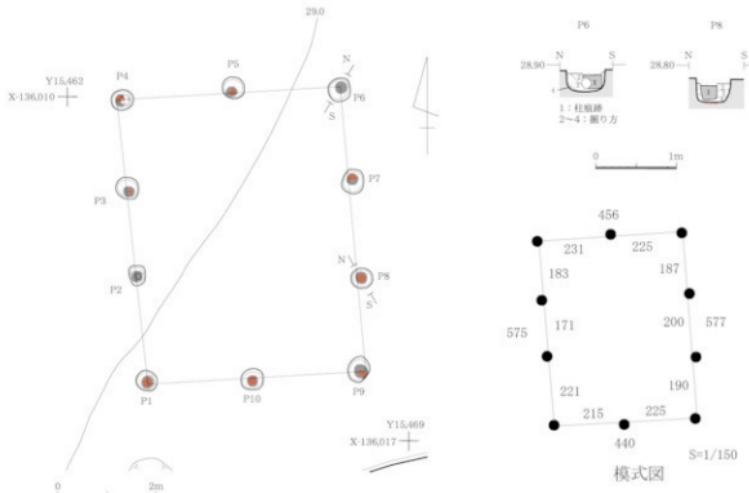
IV. 検出した遺構と遺物

〔延べ床面積〕 26.39m²

〔柱穴掘り方〕 平面形：隅丸方形～円形。埋土：褐灰色シルト質粘土（地山土を多く含む）、黒褐色粘土（地山土を含む）、明黄褐色粘土。

〔柱痕跡〕 平面形：円形～楕円形。堆積土：黒褐色粘土～シルト質粘土で炭化物粒、焼土粒を若干含む。柱穴底面の柱痕跡部分は変色している。

〔出土遺物〕 P 6 柱痕跡から土師器壺口縁部小片(口クロ、内黒)、甕底部小片（非口クロ）が出土した。



No.	柱 穴 形	柱 穴 深さ	柱 痕 形	柱 痕 深さ	変色	その他	標高 上輪	底面	
P1	隅丸方形	0.45, 0.40	円 形	0.26, 0.25	○		28.95	28.74	
P2	楕円形	0.40, 0.34	楕円形	0.20, 0.25	○	×	29.07	28.76	
P3	円 形	0.44, 0.50	円 形	0.21, 0.24	○	○	29.12	28.91	
P4	円 形	0.42, 0.45	円 形	0.27, (0.20)	○	○	29.14	28.84	
P5	円 形	0.48, 0.44	0.14	楕円形	0.20, 0.24	○	28.98	28.84	
P6	隅丸方形	0.45, 0.46	円 形	0.25, 0.25	○	×	炭化物多、土師器	28.93	28.67
P7	円 形	0.50, 0.44	円 形	0.24, 0.24	○	○		28.86	28.62
P8	円 形	0.40, 0.45	円 形	0.24, 0.24	○	○	炭化物若干	28.82	28.54
P9	隅丸方形	0.43, 0.48	楕円形	0.30, 0.25	○	○	燒土粒	28.77	28.54
P10	円 形	0.43, 0.46	円 形	0.22, 0.20	○	○		28.83	28.59

柱穴属性表

第7図 3号建物跡

3. 土坑と出土遺物

4号土坑

【位置】調査区西側のやや急な斜面に位置する。

【確認面】Ⅲ層。

【重複】4号土坑→7号溝跡。

【規模】東西2.07m、南北1.69m、深さ1.42m。

【平面形】楕円形。

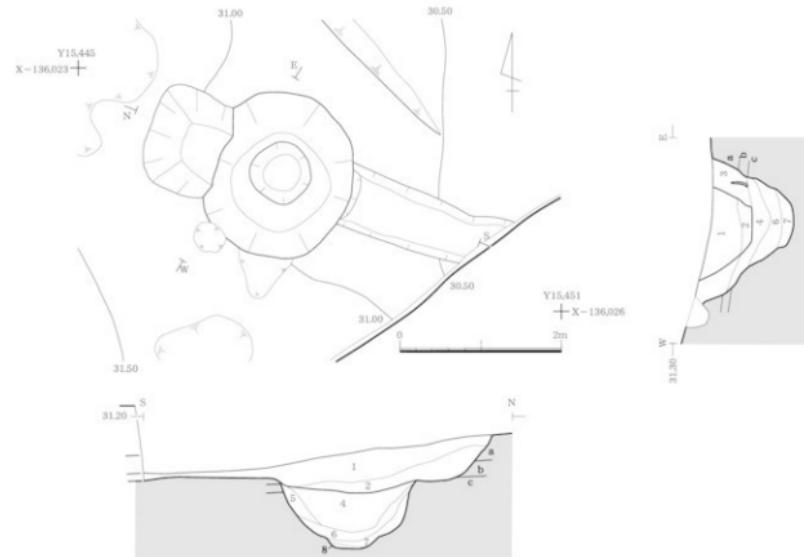
【底】Ⅲ層。中央付近が径0.72~0.74m、深さ25mで隅丸方形状に窪む。

【壁】Ⅲ層。底面からやや急に立ち上がり、一旦平坦となりやや急に立ち上がる。

【堆積層】大別2層。上層（層No.3~6）は自然堆積。層No.1には灰白色火山灰粒を含む。下層（層No.7、8）は炭化物、焼土をやや多く含むもので自然堆積。機能時。

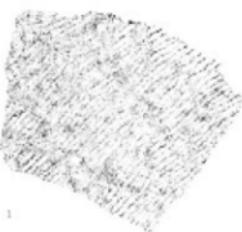
【出土遺物】須恵器甕が各層より、鉄製品が上層、砥石が下層より出土した。

【備考】上面で7号溝跡の重複を確認できず、掘り下げ中に溝跡の重複を認識したので4号土坑上層の遺物の取り上げに問題があった。



層	土色	土性	含有物など	堆積範囲
1	黒褐色	10YR3/2	粘土 自然堆積。	7溝
2	黒褐色	10YR2/1	粘土 地山ブロック(茎と脚起部)が多く、炭化物をまばらに含む。特に底部では地山ブロックを多く含む。自然堆積。	
3	黒褐色	10YR3/2	粘土 灰白色火山灰粒をまばらに含む。自然堆積。	
4	黒褐色	10YR2/2	粘土 地山ブロックをまばらに含む。自然堆積。	4土
5	黒褐色	10YR2/2	粘土 4土と同様の含有物。	
6	黒褐色	10YR0/6	粘土 黒褐色粘土粒をまばらに含む。自然堆積。	
7	黒褐色	10YR3/1	粘土 地山粘土をまばらに含む。自然堆積。	
8	褐色	10YR4/6	粘土 黒褐色土粒をまばらに含む。自然堆積。	機能時

第8図 4号土坑・7号溝跡



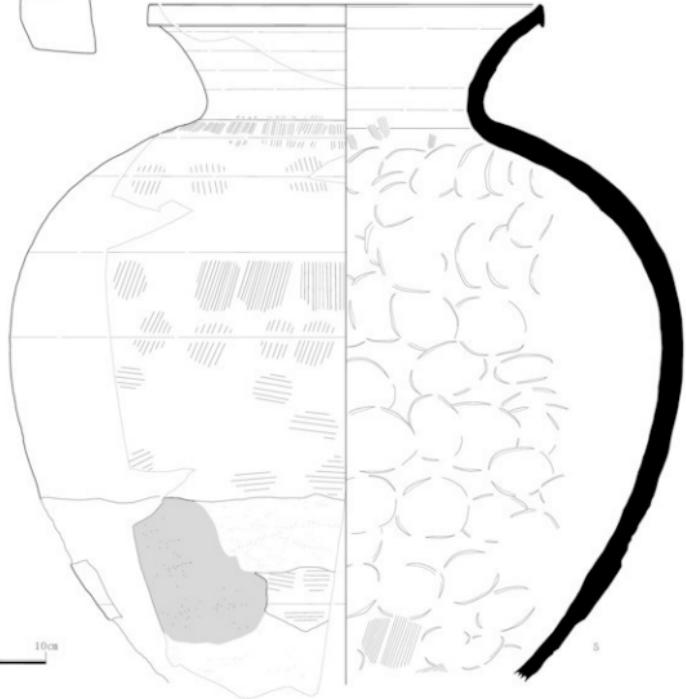
2



4



3



5

No.	層位	種類	形態	残存	體高	口径	底径	特徴	登録	図版
1	7溝1層	須恵器	實 体部	—	—	—	—	外:平行タキ、灰白(10YR8/1)→褐灰(10YR6/1),内:平行タキ、灰白(10YR7/1),海綿状骨を微量に含む。	R007	—
2	4±1層	鉄製品	刀子?	葉部か、長さ:4.5cm、幅:0.8~1.0cm、厚さ:0.4cm、重さ:6.4g、断面は上部(開口)12四角形、下部はU字形、鍛造れあり	R016	7				
3	4±6層	石製品	硯石	兎形、長さ:16.1cm、幅:5.5cm、厚さ:3.5~5.3cm、重さ:618.1g、表面に使用面があり	R006	7				
4	2溝1層	瓦	板瓦	破片、重さ:136.0g、凹面:ハクリ、凸面:彫タキ、瓦文文様:山形文、黄灰(2.5Y6/1)→灰青(2.5Y6/2)	R008	7				
5	1±2層	須恵器	實 体部	1/5	—	24.4	—	外:ロクロナデ、平行タキ→ロクロナデ、断面(7.5YR4/2)内:ロクロナデ、押さえ瓶跡(無文)→ナデ、にぶい焼(2.5YR5/2)	R005	7

第2表 4号土坑・7号溝跡出土遺物観察表

5号土坑

[位置] 調査区中央付近の平坦面に位置する。

[確認面] III層

[重複] なし。

[規模] 東西0.38m、南北0.70m、深さ0.09m

[平面形] 圓丸長方形。

[底] III層。ほぼ平坦。底面の一部が若干火炎により赤変している。

[壁] III層。やや急に立ち上がり、中ほどより緩やかに立ち上がる。

[堆積層] 大別1層。層No.1には焼土ブロック、層No.2には炭化物を多く含む。機能時。

[出土遺物] 遺物は出土していないが、表土除去の際に5号土坑付近より須恵器壺（第12図1）が1点出土した。

4. 溝跡と出土遺物

6号溝跡

[位置] 調査区西側のやや急な斜面から緩斜面に位置する。

[確認面] III層上面。断面等で確認するとII層上面より掘り込まれている。

[重複] なし。

[方向] N-86° -W。

[規模] 17.9m分を確認。南から3.2m伸び一旦1.6m途切れ、さらに北側に13.1m延びる。溝跡はさらに南北方向に伸びる。検出面では上幅0.2~0.6m、深さ0.03~0.13m、断面でみると上幅1.3~1.5m、深さ0.55mある。

[底] III層。底面は平坦から皿状。

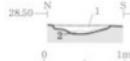
[壁] II層、III層。壁は緩やかからやや急に立ち上がる。

[堆積層] 大別1層。自然堆積。

[出土遺物] 須恵器壺か甕体部小片が1点出土した。

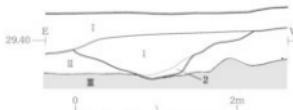
7号溝跡

[位置] 調査区西側のやや急な斜面に位置する。



第10図 5号土坑断面

層	土色	土性	含有物など	堆積範囲
1	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	砂十を多く、地山小ブロック、炭化物をまばらに含む。	
2	黒色 N1.5/	シルト	黒褐色シルト質粘土を全体に含む。炭化物を多数含む。	機能時



第11図 6号溝跡断面

層	土色	土性	含有物など	堆積範囲
1	黒褐色 10YR3/1	粘土	地山粒、炭化物を微量含む。自然堆積。	
2	黒色 2.5Y2/1	粘土	地山小ブロックをやや多く含む。やわい。自然堆積。	

IV. 検出した遺構と遺物

[確認面] III層上面。南側の断面ではII層上面より掘り込まれている。

[重複] 4号土坑→7号溝跡。

[方向] N-72°-W。

[規模] 4.62m分を確認。さらに南側に伸びる。上幅0.60~1.30m、深さ0.02~0.75m。

[底] III層及び4号土坑堆積層。底面は平坦から皿状。

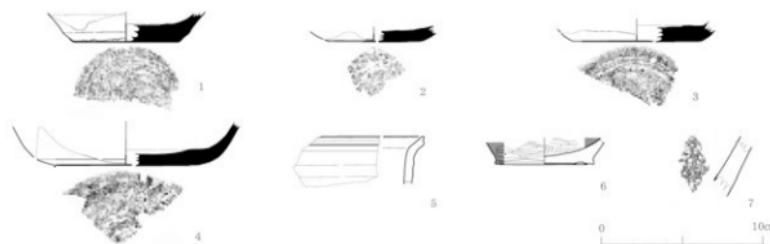
[壁] III層及び4号土坑堆積層。壁は緩やかからやや急に立ち上がる。

[堆積層] 大別1層。自然堆積。

[出土遺物] 堆積層より須恵器甕体部破片、軒平瓦破片、鉄滓が出土した。このうち須恵器甕は4号土坑出土の須恵器甕と接合することから、土坑より流れ込んだものである。

5. 遺構外出土遺物

基本層I層から須恵器、土師器が出土した。また、調査区周辺を広範囲に踏査し、縄文土器、剥片、須恵器、土師器、現代の磁器を表面採集している。ここでは、器形のわかるものや特徴のわかるものについて図示する。



No.	層位	種類	器種	残存	高さ	口径	底径	特徴	登録	図版
1	表土	須恵器	甕	1/2	—	—	6.4	外:ロクロナギ、裡(5YR6/6)、底部:回転角切り、内:ロクロナギ、裡(5YR7/6)、海綿骨針を含む	R009	
2	表土	須恵器	甕	底部	—	—	7.6	外:ロクロナギ、裡白(2.5Y7/1)、底部:回転角切り、内:ロクロナギ、裡白(2.5Y7/1)	R011	
3	表土	須恵器	甕	底部	—	—	7.6	外:ロクロナギ、裡黄褐色(10YR6/2)、底部:回転へり切り→再調整、内:ロクロナギ、裡黄褐色(10YR6/2)	R012	
4	表土	須恵器	甕	1/3	—	—	8.8	外:ロクロナギ、裡白(5Y7/1)、底部:回転ヘラ切り、内:ロクロナギ、裡白(5Y7/1)	R010	
5	表土	土師器	甕	口縁部	—	—	—	外:ロクロナギ、内:赤褐色(5YR7/3)、内:ロクロナギ、裡黄褐色(10YR6/2)	R013	
6	表土	土師器	高台甕	底部	—	—	6.0	外:ロクロナギ、裡褐色(10YR3/2)、底部:回転糸切り、内:ナギ、内:ロクロナギ→ミガキ、黑色処理、黒(10YR2/1)	R015	
7	表土	縄文土器	不明	全体部	—	—	—	外:網文、内:赤褐色(5YR5/3)、内:ナギ、内:赤褐色(5YR7/4)	R014	

第12図 遺構外出土遺物

V. 考察

1. 出土遺物について

発掘調査により各遺構から土師器、須恵器、瓦、鉄製品、石製品が出土した。出土した遺物の数量が少なく全体の器形が判明するものはないが、遺物の特徴をまとめ、次に遺構の年代を検討する。

(1) 出土遺物の特徴

須恵器には壺、甕、壺があるがいずれも破片である。壺は底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもの（a類）、回転糸切りによるもの（b類）がある。a類では再調整されるものもある。全体の器形は不明であるが、b類では底部よりほぼ直線的に外傾するものが多い。甕は4号土坑から出土したもののがほぼ全体の器形が判明するもので中型品である。頸部が外反し、口縁端部外側に口縁帯が作り出される。肩が張るもので底部に向かい窄まるとみられる。外面では平行タタキの後口クロナデ、内面は押さえ痕跡（無文）が行われる。破片資料では内外面ともに平行タタキが行われるものがある。

土師器には壺、高台壺、鉢、甕があるがいずれも破片である。壺はロクロを用いないで製作されるもの（a類）とロクロを用いて製作されるもの（b類）がある。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理されるが、全体の器形は不明である。b類の底部切り離しは回転糸切りによるものがある。高台壺は内外面ともにヘラミガキ、黒色処理される。底部は回転糸切りにより切り離され短い高台が取り付けられる。甕はロクロを用いないで製作されるもの（a類）とロクロを用いて製作されるもの（b類）がある。a類では外面がハケメあるいはヘラケズリ調整、内面ではハケメ調整が行われる。b類は小型のものである。このほか体部をロクロナデの後縦方向にヘラケズリ調整するものがある。

土師器は東北地方南部の土師器と同様の特徴をもつものであり国分寺下層式から表杉ノ入式^(註1)に該当する。須恵器についてもこれらの時期に伴うものと同様の特徴を持つものと考えられるので、およそ8世紀後半から9世紀代のものと考えられる。

(2) 遺構の年代について

前項では出土した遺物の特徴をまとめた。いずれも破片であり、遺構からの出土も少ない。このことから具体的な組み合わせは不明であるが、遺構ごとに年代を考える。

【1号竪穴遺構】堆積層より土師器壺a類、壺b類の可能性のあるもの、鉢、須恵器壺a類の可能性の高いもの、壺b類、土製品が出土した。掘り方や底面から出土した遺物がなく、構築時や機能時の詳細な時期は不明である。出土遺物のうち、須恵器壺a類と壺b類が共存し、ロクロを用いて製作した土師器が出土しているものとして伊治城跡SX324土壤^(註2)、長者原遺跡第27号住居跡^(註3)、色麻町上新田遺跡第1号住居跡^(註4)、白石市青木遺跡第21号住居跡^(註5)がある。伊治城跡SX324土壤は宝亀11年（780）の火災後に残滓を埋め戻したもの、長者原遺跡第27号住居跡は出土遺物が少ないがおおよそ9世紀を前後する時期のもの、上新田遺跡第1号住居跡は表杉ノ入式期では古い段階のものとして9世紀初頭頃のもの^(註6)、青木遺跡第21号住居跡は9世紀前半頃のもの^(註7)と考えられている。1号竪穴遺構では床面から器形のわかる遺物がなく詳細な時期は不明だが、類例や土師器でロクロを用いた可能性が高い破片があるので8世紀後半から9世紀前半頃以降に埋没した可能性が考えられる。

【3号建物跡】土師器壺b類、土師器甕a類が出土しているが、破片資料のため詳細な時期は不明である。出土遺物から廃絶した時期は9世紀以降と考えられる。2号建物跡は3号建物跡の北側梁行をそろえて計画的に配置するものなので同時に存在したものと考えている。

【4号土坑】堆積層より須恵器甕、鉄製品が出土した。上層に灰白色火山灰粒(註8)を含むことから、出土した遺物は10世紀前葉以前のものである。

【5号土坑】遺構から出土した遺物はないが、表土除去の際、5号土坑付近より須恵器壺bが出土している。1号竪穴遺構出土の須恵器に類似しているので、同様の年代が考えられる。

【6号溝跡】堆積層より須恵器甕体部小片が出土したことから古代以降のものと考えられる。

【7号溝跡】堆積層より須恵器甕、軒平瓦が出土している。遺構は灰白色火山灰を含む4号土坑より新しいものなので10世紀前葉以降のものである。

(3) 瓦について

丘陵急斜面に位置する7号溝跡1層より山形文軒平瓦が1点出土した。凹面に布目、凸面に繩タタキが行われ、頸部はナデ調整されるものである。同様の軒平瓦は伊治城跡で出土した遺物を収集した松森コレクション内に1点ある。伊治城跡では北側に位置する大堀地区で採集されたもので同地区では山形文の文様が崩れた可能性が高い箇描文軒平瓦も1点採集されている(註9)。これまで伊治城跡で実施された発掘調査では政府付近でまとめて軒丸瓦、丸瓦、平瓦が出土しているが、軒平瓦は出土していない。これらの瓦は伊治城跡II期の建物が火災を受けた後、残滓の一括廃棄を行ったと考えられる土坑から多数出土している(註2)。この火災は宝亀11年(780)の伊治公皆麻呂の乱に起因し、火災を受けた建物は政府を構成する建物に葺かれていたと考えられている。伊治城跡で出土する軒丸瓦は重圓文軒丸瓦であり、採集品である山形文軒平瓦以外の軒平瓦が知られていないことからこれらが組み合う可能性も残る。また、同様の軒平瓦は多賀城跡政府地区で出土した鋸歯文軒平瓦630として報告されているものに該当すると考えており、宝亀11年(780)の多賀城炎上の後に8世紀末葉ころまで



No.	地 区	種類	基種	特 徴	登 録	回 取
1	大堀	瓦	軒平瓦	破片、厚さ：4.2cm、重さ：238.7g。凹面：布目、焼(N6/～N5/)、白面：繩タタキ、ナデ、焼(7.5Y5/1)～暗焼(N3/)、基面：ヘラケズリ、暗焼(N3/)～焼(7.5Y4/1)、瓦当：山形文、焼(N4/)	MC DU-O-3	7-5
2	大堀・遺構跡	瓦	軒平瓦	破片、厚さ：4.2cm、重さ：528.5g。凹面：布目、暗焼(N3/)～黒(N2)、凸面：繩タタキ、ナデ、白面：ヘラ描き文、灰白(2.5GY8/1)	MC DU-O-4	7-6

第13図 伊治城跡出土の軒平瓦(松森コレクション)

に復興された多賀城Ⅲ期に位置づけられるものである（註10）。このことから、泉沢A遺跡から出土した軒平瓦の年代は大よそ伊治城跡が存続した時期のもので780年を前後する8世紀後半から9世紀初頭頃のものと考えられる。

伊治城跡と泉沢A遺跡で同種の軒平瓦が出土していることから、両遺跡は密接な関係を持つものと考えられる。しかし、泉沢A遺跡から軒平瓦が出土した理由については遺構を確認できていないので明確ではない。遺跡内で使用されたか、あるいは泉沢A遺跡から出土した軒平瓦と4号土坑から出土した須恵器甕の胎土や焼成の状況が類似しているので付近にこれらを焼成した窯が存在する可能性もありうると考えている。

（4）胎土に海綿骨針を含む土器群について

出土遺物の胎土を観察したところ、海綿骨針（あるいは白色針状物質とも呼ばれる）が含まれていた。海綿骨針は土器胎土の原材料となった海成起源の地層にもともと含まれるものであり、生産地の同定に有益な情報を提供するものとして研究が行われている（註11）。

破片を含めたすべての遺物について、肉眼により観察を行った。具体的な数値は第3表のようになる。これによると須恵器、土師器の両方に確認することができるが、海綿骨針を含む数量は出土した破片数の約1割程度であった。この数値の評価についてはなお周辺の集落の状況を把握する必要があるが、一定の割合で泉沢A遺跡に供給されたものと考える。

泉沢A遺跡の南東約2.5kmに所在する伊治城跡から出土した遺物についても報告書掲載資料を中心に行き検討を行ったところ、出土遺物の全体を確認したわけではないが、須恵器、土師器で海綿骨針を含むものがあることを確認できた（註12）。城柵官衙遺跡であり広域から製品が搬入されることが想定できる伊治城跡だけでなく、集落である泉沢A遺跡にも海綿骨針が含まれる土器が供給されていることは古代栗原郡内における土師器及び須恵器の生産地に海綿骨針を含む陶土を持つ場所があるということになり、この地点から伊治城跡及びその周辺の集落に製品が供給された可能性が高いという見通しを

遺構	種類	海綿骨針	
		含まない	含む
1 竪穴	須恵器	6	1
	土師器	20	36
	土製品	1	0
3 建	土師器	2	0
4 土坑	須恵器	4	0
6 溝	須恵器	1	0
7 溝	須恵器	3	0
	瓦	1	0
	総数	38(51%)	37(49%)

泉沢A遺跡（遺構）

種類	海綿骨針	
	含まない	含む
須恵器	23	1
土師器	59	8
総数	82(92%)	9(8%)

泉沢A遺跡（遺構外）

種類	海綿骨針	
	含まない	含む
須恵器	48	48
土師器	2	2
総数	50(89%)	6(11%)

泉沢B遺跡採集品

種類	海綿骨針	
	含まない	含む
繩文	2	0
須恵器	45	6
土師器	47(89%)	6(11%)

泉沢A遺跡表面採集品

泉沢A遺跡1号竪穴で海綿骨針を含む割合が高いことの要因は同一個体の可能性が高い甕が細かい破片となっているためである。これを一個体と換算すると含まないものが38点（95%）、含むものが2点（5%）となる。

第3表 泉沢A遺跡及び泉沢B遺跡出土遺物の海綿骨針を含む比率

もっている。海綿骨針を含む地点についての詳細な位置は現在のところ不明であるが、金成地区にある近世末から近代にかけて生産された新田焼（註13）の焼き台には海綿骨針が含まれることを確認しているので、金成地区が生産地の候補のひとつとしてあげることができる（註14）。

栗原市内においても海綿骨針の有無により生産地を判断できる可能性がでてきた（註15）ことから、ほかの集落での状況を確認するとともに、海綿骨針を含む土器の特徴を把握することにより、古代栗原郡の土器生産および供給体制の解明に近づけるものと考えている（註16）。

2. 遺構について

（1）重複関係

検出した遺構のうち重複関係があるものや方向などから同時期と考えられる遺構は次の通りである。

重複 4号土坑→7号溝跡

同時期の可能性が高いもの 2号建物跡、3号建物跡

各遺構から出土した遺物を検討した結果、1号竪穴遺構、3号建物跡、4号土坑が古代のもので、5号土坑についても古代の可能性がある。ここでは類例をもとに遺構の性格について検討する。

（2）遺構について

【竪穴遺構】

調査区内の平坦面で1基確認した。径4mほどの楕円形である。掘り方埋め土を床としているが、掘り方上面および掘り方除去後の地山面でも施設は確認できない。堆積層は自然堆積によるもので床面付近まで比較的形のわかる炭化物片を含んでいる。西側に位置する焼土や炭化物を多く含む5号土坑よりも流れ込んだ可能性もある。時期は堆積層出土遺物から8世紀後半から9世紀代の時期のものと考えている。

類似する遺構として名生館遺跡SX320、SX343、SX349、SX351竪穴遺構（註17）、SK845土壙（註18）があげられる。これらは掘立柱建物跡と同時期のもので、平面形は方形を基調とする。方形を基調とする竪穴遺構は山王遺跡多賀前・伏石・八幡地区でも確認されており、出土遺物や遺物の出土状況から工房や作業所と考えられている（註19）。また、ほぼ同規模で堆積状況も類似する土壙についても同様の性格を持つ可能性も考えられている（註20）。名生館遺跡ではこれらの性格のほか、収蔵施設（物置）の可能性が考えられている。

泉沢A遺跡で確認した竪穴遺構については性格を確認できる遺物や施設がないことから明確には断定できないのだが、作業所や収蔵施設（物置）などの可能性も考えている。

【建物】

調査区内の平坦面で2棟確認した。いずれも南北棟である。0.4～0.5mの円形から楕円形の柱穴で大きさはほぼ同一であり、底面で柱が接していた部分が変色するという類似した特徴を持つ。2号建物跡は桁行2間以上（5.56m以上）、梁行2間（4.10m）、3号建物跡は桁行3間（5.77m）、梁行2間（4.56m）であり、2号建物跡が3号建物跡より柱間が長く、規模では異なる点がみられる。しかし、27.4m離れるにもかかわらず建物の方向が同一であること、北側梁行がそろうことから計画的に配置されている。このことは2棟が同時期のものであることを示すと考えている。3号建物跡柱痕跡から

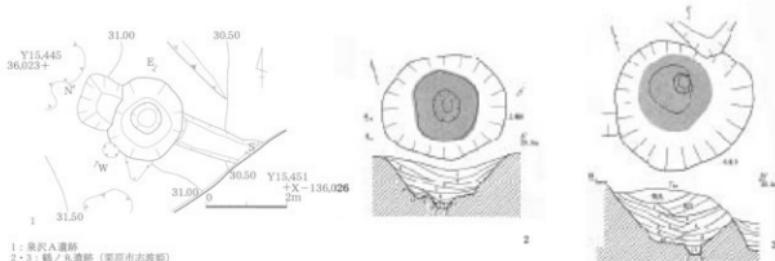
は口クロを用いて製作された土師器が出土しているので、9世紀代のものであろう。

【土 坑】

土坑は2基確認した。

4号土坑は西側緩斜面に位置する径2.1～1.7mの円形であり、堆積層の上部に灰白色火山灰粒を含むことから、10世紀前葉以前に廃絶したことがわかる。この土坑の特徴として底面がさらに径0.75m、深さ0.2mほどくぼむことをあげることができる。このような形態を持つ土坑は栃木県においては「円形有段遺構」と呼称されており、中山晋氏によれば「冰室」の可能性も指摘されている(註21)。栗原市内において同様の特徴を持つ土坑として志波姫地区に位置する鶴ノ丸遺跡土壙8、9がある(註22)。鶴ノ丸遺跡の土坑は中世の遺構と重複しこれより古いので、古代の可能性が考えられている。いずれも底面付近の壁面が火を受けて赤変しており、具体的な用途は不明であるが同一の機能を持つものと考えられる。泉沢A遺跡4号土坑では底面が焼けてはいないが、下層で焼け土や炭化物が顯著に認められたことから、鶴ノ丸遺跡の土坑と類似する性格を持つものと考えられる。ところで、栗原市内でこの遺構を確認した遺跡は伊治城跡の南東側と北西側に位置している。鶴ノ丸遺跡は東北自動車道関係の発掘調査により、平安時代の住居2棟が確認されており、栗原市内で確認されている集落では一般的なものと捉えられるが、周辺には吹付遺跡など多数古代の集落が確認されており、墨書き土器も出土している。さらに詳細な検討は必要なのだが伊治城跡とのかかわりも考えられる。現段階では性格について明確に言及できないので、今後伊治城跡周辺での類例の増加を待って、「冰室」とされる遺構も含め検討を加えたいと考えている。

5号土坑は調査区平坦面、1号竪穴遺構に近接した位置にある。残存状況が悪いが底面の一部が火熱により赤変しているとともに底面付近に炭化物層、その上面に焼土が確認できることから、遺構内で火を用いた作業を行ったものと考えている。特に底面付近に炭化物が確認できることから炭を作製したものである可能性も考えている。遺構の時期は遺物がないことから明確ではない。しかし、詳細な出土位置を記録できていないが表土除去の際に回転糸切りによる須恵器坏が出土している。この遺物が5号土坑の年代決定資料になるものと考えており、古代の可能性が高いものと考えている。



1: 泉沢A遺跡
2・3: 鶴ノ丸遺跡(栗原市志波姫)

第14図 4号土坑と類例

3. 遺跡の性格について

今回の調査区は泉沢A遺跡の南側付近を東西に調査した形となる。周辺の畠地では平坦面を中心古代の遺物が散布する状況を確認している。泉沢A遺跡の一部を調査したのみであり、遺跡全体の様相については不明な点があるが、遺跡の性格について考える。

今回の調査では建物2棟を確認した。建物は27.4m離れるが方向が同一であること、北側梁行がそろうことから極めて計画的に配置されているといえる。また、1号竪穴造構は2号建物跡北西隅柱より12.4m、3号建物跡北東隅柱より11.4mとほぼ中間に位置しており、計画的に配置される可能性が高いことから同時期の可能性もありうると考えている。また、4号土坑についても類例の少ない形態であり、栗原市内では伊治城跡周辺でのみ確認されている。確認できた造構は出土遺物からみるとおよそ8世紀後半から9世紀初頭の時期と考えられ、伊治城跡と同種の軒平瓦が出土したことから、伊治城存続期に泉沢A遺跡が機能していた時期があった可能性が高いものと考えている。

栗原市内の奈良・平安時代では竪穴住居跡で構成される集落が一般的であるが、掘立柱建物跡が確認できた点でこれらとは異なる集落形態を持つと考えている。集落の構成に掘立柱建物が加わる遺跡として築館地区に位置する下萩沢遺跡、原田遺跡^(註23)、志波姫地区に位置する吹付遺跡^(註24)があり、伊治城跡との関連が考えられている。今回の調査は遺跡のごく一部を調査したのみである。今後平面的な調査を行うとともに、東側にある長者原遺跡などを含めて検討を加える必要がある。

註

註1 氏家和典1957「東北地方土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯と氏家和典1967「陸奥国分寺跡出土の丸底窓をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』。註2 築館町教育委員会1992『伊治城跡－平成3年度発掘調査報告書一』築館町文化財調査報告書第5集と築館町教育委員会1993『伊治城跡－平成4年度発掘調査報告書一』築館町文化財調査報告書第6集。註3 栗駒町教育委員会1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集。註4 宮城県教育委員会1981「上新田遺跡」「長者原遺跡 上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集。註5 宮城県教育委員会1980「青木遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書IV」宮城県文化財調査報告書第71集。註6 加藤道男1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』277～328頁。註7 村田晃一1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会 103～117頁。註8

灰白色火山灰の降下年代は『扶桑略記』の記述から西暦915年をあてて見解もあるが、ここでは考古学的な事実関係（宮城県多賀城跡研究所1998『宮城県多賀城跡研究所年報 1997 多賀城跡』、76頁）から西暦907年から934年の間と考える。註9 軒平瓦の名称は築館町文化財保護委員会1969『伊治城跡出土品目録（築館町指定重要文化財）』築館町文化財保護委員会伊治城跡資料集1集によったが、今後残存状況の良好な軒瓦が出土した時点で名称の検討を行う必要があると考えている。註10 宮城県多賀城跡調査研究所1982『多賀城跡政府編』200～201頁、337～386頁。註11 井上雅孝1995『海綿骨針を含む統繩文土器について一胎土から見た後北C2・D式土器の一視点一』『みちのく発掘－菅原文也先生還暦記念論集－』菅原文也先生還暦記念論集刊行会、289～304頁。註12 SI173住居跡出土須恵器环蓋（築館町教委1991、第16図7）、SX324出土須恵器环（築館町教委1991、第11図9）、SX341土器埋設造構出土土師器甕（築館町教委1994、第16図2）などがある。註13 金成町教育委員会1997『有馬新田焼』金成町の文化財その19。註14 金成地区では小迫神社窯跡（瓦陶兼窯）、三沢窯跡（採集資料には複弁蓮華文系の軒丸瓦、回転糸切りによる环がある）などが知られている。さらに金成地区には近世には末野村と呼ばれた地域がある。地名から考えると須恵器とのかかわりも考えられる（例えば、菊池敬之助1970『宮城県地名考』宝文堂、569～570頁）ので、今後踏査を実施し、窯跡が存在するか確認したいと考えている。この他、栗原市内では山王園遺跡（一迫地区、弥生時代）、萩田遺跡（高清水地区、弥生時代）、高清水城跡（高清水地区）の製品に含まれることを確認している。註15 これからの検討課題と考えているが、例

えば伊治城跡SI173住居跡の坏蓋では海綿骨針を含むもの（築教委1994、第16図78）と含まれないもので器形が同一のもの（築教委1994、第16図74～77）を比較すると、含むものは火ダスキの痕跡が内外面で確認でき、含まれないものは火ダスキの痕跡は確認できず、内面に径8cmの製品を重ねた痕跡と外面の口縁部付近の色調が異なるという特徴を持つ。器形、胎土、焼成方法で相違が確認できるので異なる窯で焼成されたものと考えている。註16 なお、筆者は合併以前瀬峰地区内の発掘調査を担当してきた。瀬峰地区では7世紀代の在地土師器坏に海綿骨針が含まれることは確認しているが8世紀以降の土師器及び須恵器では微量は含まれるが確認できない状況と同じである。また、田尻町新田櫻跡推定地でも確認できていないと田尻町教育委員会車田敦氏よりご教示いただいた。瀬峰地区は古代においては新田郡との意見がある。このような相違が各郡の土器の生産や供給体制の差を反映しているのかもしれない。註17 宮城県教育委員会2000「名生館遺跡」「名生館遺跡」宮城県文化財調査報告書第183集、62頁。註18 宮城県教育委員会2001「名生館遺跡」「名生館遺跡」宮城県文化財調査報告書第187集、74～75頁。註19 宮城県教育委員会1995『山王遺跡Ⅱ 多賀前地区構構編』宮城県文化財調査報告書第169集と宮城県教育委員会1997『山王遺跡V』宮城県文化財調査報告書第174集。註20 宮城県教育委員会2000「名生館遺跡」「名生館遺跡」宮城県文化財調査報告書第183集、67頁。註21 中山晋2001「水室研究の現状と課題」「研究紀要」第9号、財團法人 とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、225～240頁。註22 宮城県教育委員会1981「鶴ノ丸遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告V」宮城県文化財調査報告書第81集。註23 宮城県教育委員会2004『築館町下萩沢遺跡 原田遺跡 現地説明会資料』、宮城県教育委員会2005「下萩沢遺跡・原田遺跡の調査成果の概要」「第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」、287～292頁。註24 宮城県教育委員会2005「吹付遺跡」「壇の腰遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第202集。

VI. ま と め

1. 泉沢A遺跡は栗原市栗駒泉沢谷地田地内に所在する。標高30mほどの丘陵緩斜面から平坦面に位置する。これまで古代の遺物が採集されており、古代の散布地として遺跡登録されていた。
2. 発掘調査により、古代の可能性が高い掘立柱建物跡2棟、竪穴遺構1基、土坑2基、古代以降の溝2条を確認し、縄文時代の遺物と古代の遺物が出土した。
3. 縄文時代の遺物を調査区北側で2点採集した。遺構は確認できていないが、調査区周辺に遺構が存在する可能性もある。
4. 古代の遺構では建物跡は南北棟で方向が同じであること、北側梁行がそろうことから計画的な配置をもっている。また、建物間の中央に竪穴遺構があり、一般的な集落とは異なる集落構成である。年代は8世紀後半から9世紀代のものと考えている。また、伊治城跡と同種の軒平瓦が出土していることから伊治城跡と同時期に機能した時期もあった可能性が高いと考えている。

附章. 泉沢B遺跡及び長者原遺跡から採集した遺物について

1. はじめに

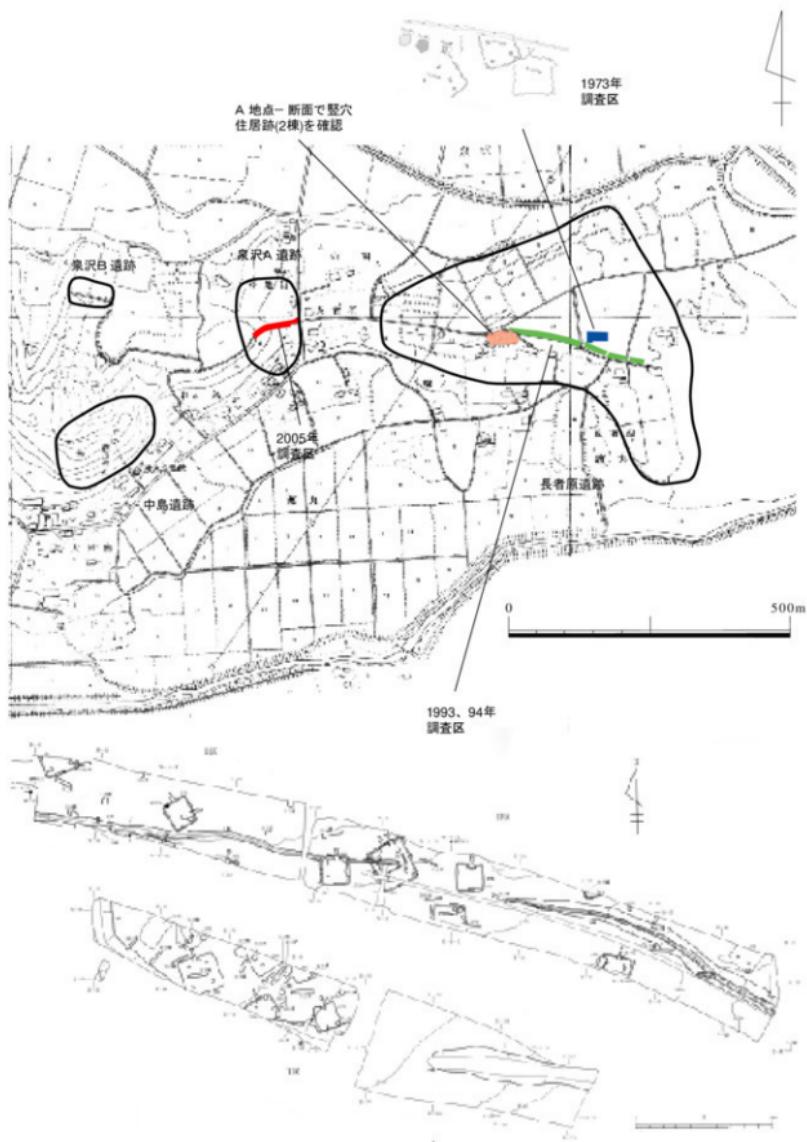
栗原市栗駒地区に所在する泉沢B遺跡は平成14年度宮城県遺跡地図において遺跡登録番号43015、所在地は「栗駒町泉沢谷地田」、時期は「古代」、性格は「窯跡？、散布地」として登録されているが、地図上では地点不明である^(註1)。今回の発掘調査に際し、聞き取りの実施と以前採集された遺物を借用し観察することができたので概要を報告する。また、関連する遺跡として泉沢A遺跡の東側300mに長者原遺跡がある。長者原遺跡は昭和48年と平成5、6年に発掘調査が実施されており、報告書が刊行されている^(註3)。ここでは昭和48年調査で出土した古代の遺物と昭和40～50年代にかけて農地造成の際に出土した古代の遺物についてその一部を報告する。採集遺物はいずれも地元の方から佐藤信行氏が貴い受けたものである。資料を提供いただいた佐藤信行氏、聞き取りに御協力いただいた地元の方々に感謝申し上げます。

2. 泉沢B遺跡と採集遺物

泉沢B遺跡は栗原市栗駒泉沢谷地田地内、泉沢A遺跡が位置する丘陵西側で北側に張り出す小丘陵の東斜面に立地する。昭和48年以前にこの小丘陵を造成した際、法面で丸い穴や赤い土（焼土）が多く確認されるとともに、黒色土の落ち込みも発見されたという。その際、比較的形のはっきりわかる土器片が採集されている。その後、「栗原郡内の生産遺跡」（『築館町史』）で泉沢遺跡として「6～7メートルにわたって細長い焼土層、灰などがあり、須恵器多数が出土した」と紹介され、窯跡の可能性が指摘^(註2)されたのが、これまで唯一の文献であった。位置が不明であったので調査中聞き取り調査をおこなったところおおよその位置が判明し、この付近の畑地では現在でも須恵器の破片が採集できるということがわかった。聞き取り後、数度現地踏査を行い須恵器壺破片1点採集したので遺跡の位置をほぼ特定することができたものと考えている。

遺物は天箱1箱分、須恵器54点、土師器2点の破片がある。須恵器には壺、高台壺？、甕、壺、甕か壺か不明のもの、器形不明のものがあり、ほとんどが甕と壺の破片である。壺は底部切り離しが回転糸切りによるものである。甕では外面がいずれも平行タタキが行われている。内面では無文、青海波紋、平行タタキ、花文状タタキなどが確認でき、これらが同一個体で複数（平行タタキと花文状）用いられているものもある。壺では外面、内面ともにロクロナデが行われている。このうち、胎土に海綿骨針を含む甕の破片が6点ある。土師器には甕底部破片がある。摩滅が著しいが底面に木葉痕が確認できるものがある。これらは泉沢A遺跡出土遺物と類似するものがあるのでおおよそ9世紀代のものであろう。

これまで窯跡資料の可能性を考えられてきたことから器面や断面、付着物など観察を行った。しかし、灰の付着、焼台に転用された痕跡など窯跡資料に特有の痕跡は確認できなかった。一部断面まで火を受けた痕跡が観察できるものがあるのだが、今回観察を行った遺物を窯跡資料とすることは難しいものと考えている。



第15図 泉沢A遺跡と周辺の遺跡

3. 長者原遺跡と採集遺物

長者原遺跡は栗原市栗駒泉沢長者原、渡丸長者原及び堀の内、築館黒瀬の一部に所在する。これまで2度発掘調査が実施されており、縄文時代の落とし穴遺構、古墳時代中期の住居と石製模造品集中地点、古代の竪穴住居跡15棟、手づくねかわらけが1点出土した古代以降の溝跡などが確認されている。古代の住居跡は出土遺物からⅠ期が8世紀後半、Ⅱ期が9世紀初頭以降と2時期に大別されたが重複関係を持つものが多く、住居の構造に齊一性が認められるので、これらの住居跡が9世紀を前後するごく短い時間幅のなかで展開した可能性も考えられている（註3）。

借用した遺物は天箱2箱分ある。この中には古墳時代中期の土師器、須恵器、黒曜石、古代の須恵器、土師器、土製品（土玉）、石製品があり、採集地点の記載のないものとあるものがある。記載のないものは昭和48年の調査区から出土したもので、『長者原遺跡』の第3号住居跡の事実記載に「E18区を中心に直径2~3mの範囲で集中的に土師器、須恵器、土玉、鉄製品等が出土した」、「上面の遺物群は、（略）、いずれも奈良時代末～平安時代のもので、遺物は故意に破細投棄された状況を示す。」と報告されている遺物に該当する。また、昭和48年調査区周辺から採集された遺物もある。記載のあるものは平成5年調査のI区南西付近の畑地（A地点）で昭和40~50年代の造成の際法面に竪穴住居跡2棟がかかり、その際採集されたものである。

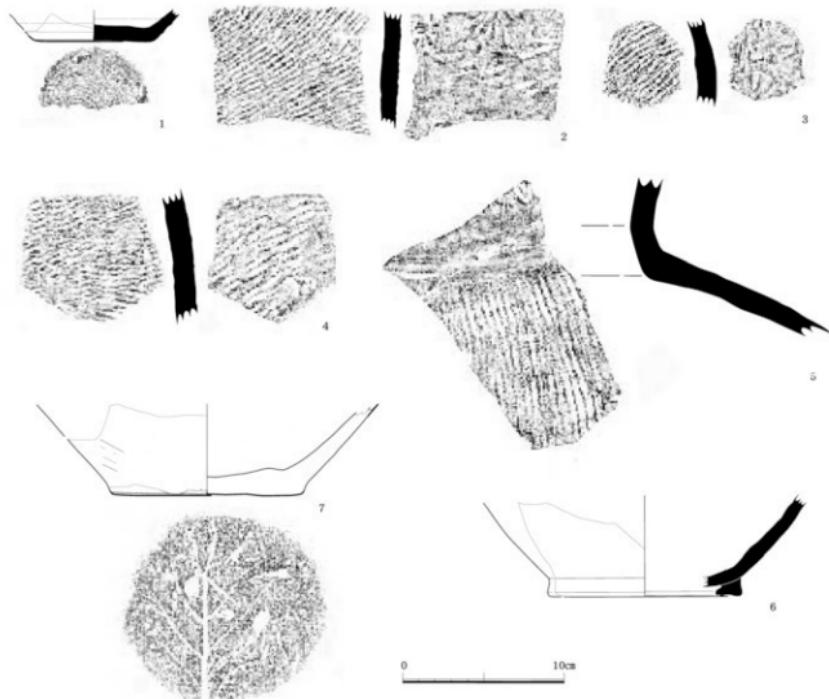
今回は時間的な制約から主に須恵器を中心に整理作業を実施し破片が付着するもの、自然釉が断面に付着するもの、粘土が製品に付着するものなど窯跡資料と関係のあるものとともに特徴の分かる資料を中心に掲載した。これらの年代は平成5、6年度調査の時期と同時期である8世紀後半から9世紀初頭ころのものと考えているが、第18図14の須恵器大甕の口縁部形態は7世紀代の特徴をもつものであり、下っても8世紀前葉頃のものであろう。このような遺物が昭和48年調査区付近で採集されているのでこれまで確認できた時期よりも古い段階の集落が存在する可能性もある。土師器についてはほとんどが未整理であるので、再度出土遺物の全体について検討したいと考えている。

4. 小 結

泉沢B遺跡出土の須恵器を中心に検討した。これまで窯跡の可能性も考えられてきたが器面の状況をみても積極的に窯跡の製品であるすることは難しい。一方、長者原遺跡に供給された須恵器をみると破片が付着した製品や断面に自然釉が付着するもの、粘土が付着するものがある。このような製品が集落に供給されていることから周辺に須恵器窯あるいは瓦窯が存在する可能性もあると考えている。遺物が出土した際の証言からその候補のひとつとして泉沢B遺跡も考えることができるが、今後さらに調査を進める必要があると考えている。

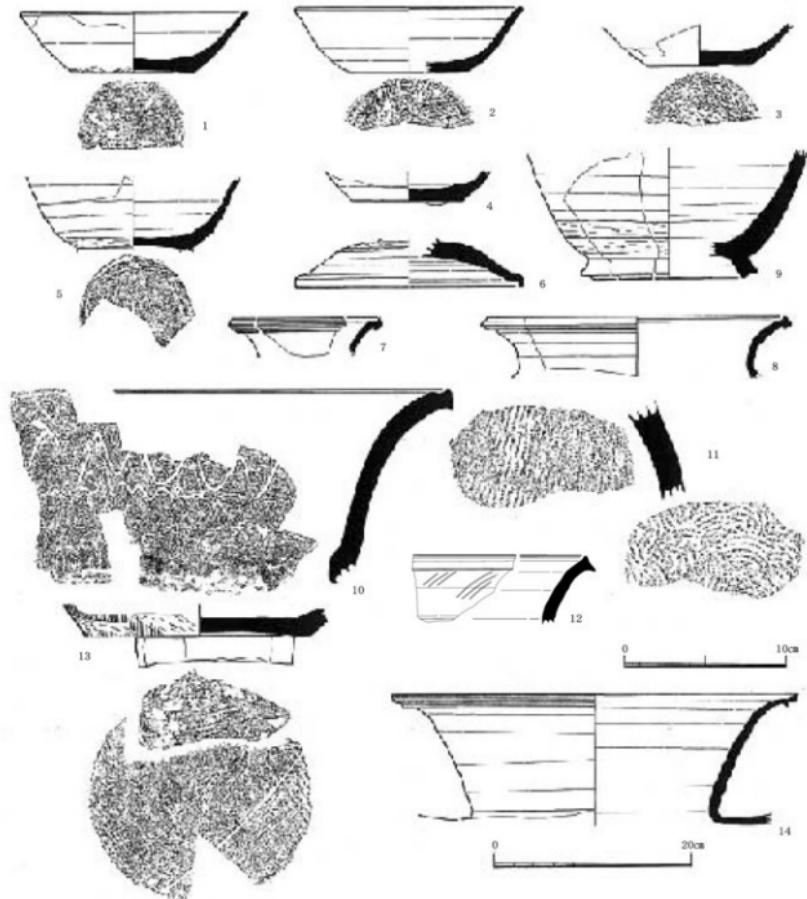
註

- 註1 宮城県教育委員会2003『宮城県遺跡地図2003年度版』。なお、泉沢B遺跡の位置が長者原遺跡と重複する可能性が考えられているのは、昭和40~50年代に長者原遺跡が泉沢遺跡と呼称されたためと考えられる。註2 築館町史編さん委員会1976「栗原郡内の生産遺跡」『築館町史』、232~234頁。註3 栗駒町教育委員会1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集。



No.	種類	器種	残存	留高	口径	底径	特 徴	登 録	図版
1	須恵器	环	底部	—	—	6.2	外:ロクロナデ, 灰白(5Y7/1), 武部:回転系切り, 内:ロクロナデ, 灰白(5Y7/1)	IZB001	
2	須恵器	甕	体部	—	—	—	外:平行タタキ, 灰(N4/1), 内:平行タタキ, 花文状タタキ, 路降り状に自然縮, 灰(N5/1)	IZB002	
3	須恵器	甕	体部	—	—	—	外:平行タタキ, 灰白(2.5GY8/1), 内:花文状タタキ, 灰(N5/1)	IZB004	
4	須恵器	甕	体部	—	—	—	外:平行タタキ, 灰灰(N3/1), 内:平行タタキ, 灰(N1/1)	IZB003	
5	須恵器	甕	体部	—	—	—	外:ロクロナデ, 波状沈線, 平行タタキ, 灰灰(N3/1), 内:ナデ, 灰(N4/1)	IZB006	
6	須恵器	甕	底部	—	—	11.6	外:ロクロナデ, 灰(N4/1), 底部:不明→高台取り付けのためのロクロナデ, 内:ロクロナデ, 灰(N6/1)	IZB005	
7	土師器	甕	底部	—	—	11.6	外:マメツ(ケズリか), にぶい赤褐色(5YR5/4), 底部:木葉模, 内:マメツ, 橙(5YR6/6)	IZB007	

第16図 泉沢B遺跡採集遺物



No.	地 区	種類	断面	残存	高さ	口径	径幅	特 徴		登録	回版
								外	内		
1	73年調査 区5住	縦底盤	Hf	1/2	3.8	14.0	7.4	外:ロクロナヂ、内:2SY7/1、底盤:回転ヘラ切り一手持ケヌリ、内:ロクロナヂ、底2SY7/1	—	—	
2	73年調査 区5住	縦底盤	坪	1/4	4.0	13.6	7.4	外:ロクロナヂ、内:2SY7/1、底盤:回転ヘラ切り一ハラナヂ、内:ロクロナヂ、底2SY7/1	—	—	
3	73年調査 区5住	縦底盤	坪	底部	—	—	6.3	外:ロクロナヂ、内:2SY7/6(6)、底部:不明一手持ケヌリ、内:ロクロナヂ、底2SY7/6(6)、その他の内:火葬	—	—	
4	A地区	縦底盤	Hf	底部	—	—	6.8	外:手持ケヌリ、内:ロクロナヂ、底盤:回転ヘラカズレ、内:ロクロナヂ、底合に植成時の粘土付着、その他の火葬あり	7-T-N	—	
5	73年調査	縦底盤	高台坪	全体	—	—	—	外:ロクロナヂ、回転ヘラカズレ、底盤:2SY7/1底部:回転底切り一様合状縫合、内:ロクロナヂ、底2SY7/1	—	—	
6	73年調査	縦底盤	圓	1/2	—	13.8	—	外:ロクロナヂ、回転ヘラカズレ、底盤:2SY7/1内:ロクロナヂ、底2SY7/1	—	—	
7	73年調査 区5住	縦底盤	圓	口縁部	—	9.2	—	外:ロクロナヂ、底2SY7/1内:ロクロナヂ、底2SY7/1	—	—	
8	73年調査 区5住	縦底盤	圓	口縁部	—	18.2	—	外:ロクロナヂ、底2SY7/6(6)、内:ロクロナヂ、縫2DN3/3～底DN7/7	—	—	
9	73年調査 区5住	縦底盤	圓	底下部	—	—	9.2	外:ロクロナヂ、底状状縫合、底盤:2SY7/1～DN5/5(5)、ロクロナヂ:DN5/5(5)、底:火葬	—	—	
10	73年調査 区5住	縦底盤	圓	口縁部	—	—	—	外:ロクロナヂ、底状状縫合、底盤:2SY7/1～DN5/5(5)、内:ロクロナヂ:DN5/5(5)、底:火葬	7-T-7	—	
11	A地区	縦底盤	圓	体部	—	—	—	外:平行タキリ、自然縫合、底:火葬、内:自然縫合、自然縫合:DN4/7	—	—	
12	73年調査 区5住	縦底盤	底か底	口縁部	—	—	—	外:ロクロナヂ、底DN7/1内:ロクロナヂ、自然縫合:DN4/7	—	—	
13	73年調査 区5住	縦底盤	圓	底部	—	—	13.8	外:平行タキリ～タヌリ、底DN7/1、底部:ケヌリ、内:ナヂ、底盤:SY7/1、自然縫合あり、その他の底:底盤:製品付縫合、底:火葬	7-T-9	—	
14	区5住	縦底盤	圓	口縁部	—	40.8	—	外:ナヂ、底DN7/1	—	—	

第17図 長者原遺跡出土遺物

写 真 図 版



国土地理院撮影
1962年 TO-62-6X C3-10

図版1 泉沢A遺跡付近の空中写真

調査区東側、東より



調査区西側、西より



調査区中央付近、
東より



図版 2



1号竪穴遺構
断面、南より



1号竪穴遺構
床面確認状況、
西より



1号竪穴遺構
掘り方除去状況、
西より

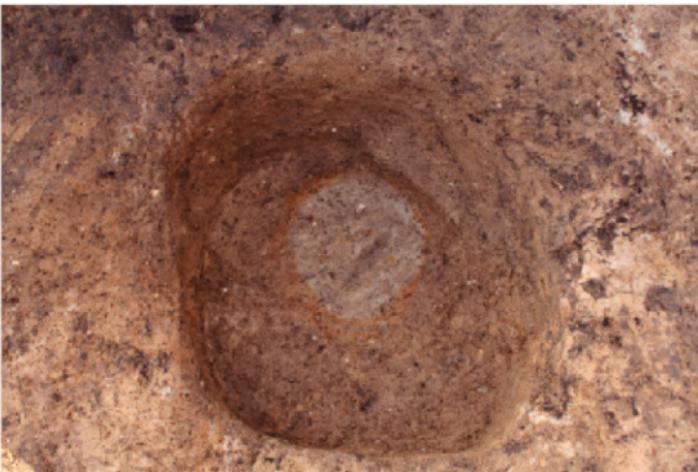
2号建物跡、北より



2号建物跡
P 2 断面、
西より



2号建物跡
P 5 完掘状況、
東より





3号建物跡、西より



3号建物跡
P 8断面、
西より



4号土坑・7号溝跡、
南より

5号土坑断面、
西より

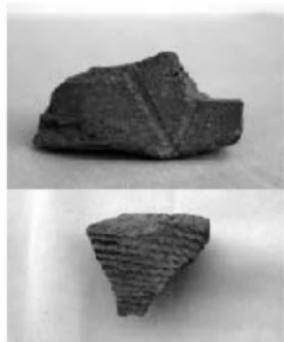


5号土坑
完掘状況、
南西より



6号溝跡断面、
北より





1. 軒平瓦（7号溝跡）



2. 砥石（4号土坑）

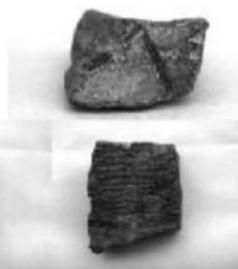


3. 須恵器甕（4号土坑）

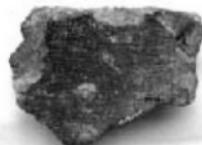


4. 鉄製品（刀子？、4号土坑）

泉沢A遺跡（1～4）



5. 山形文軒平瓦

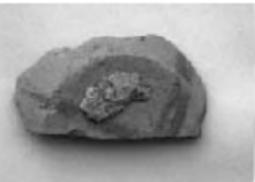


6. 筆描文軒平瓦

伊治城跡出土軒平瓦（松森コレクション、5・6）



7. 須恵器甕



8. 須恵器甕
長者原遺跡（7～9）



9. 須恵器甕

図版7 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いざみざわAいせき							
書名	泉沢A遺跡							
副書名	農道片子沢線改良工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	栗原市文化財調査報告書第2集							
編著者名	安達訓仁							
編集機関	栗原市教育委員会							
所在地	〒987-2215 宮城県栗原市築館高田2丁目1-10 TEL 0228-23-2228 FAX 0228-23-2231							
発行年月日	平成18年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
いざみざわ Aいせき 泉沢A遺跡	くりはらしゆりこいざみざわの 栗原市栗駒泉沢 谷地田地内	045268	43014	38° 46' 38"	141° 0' 28"	2005 10.31~12.22	645m ²	農道片子沢線改良 工事
遺跡名	性格	時期	検出遺構	出土遺物		備考		
泉沢A遺跡	散布地	古代	竪穴遺構 掘立柱建物跡 土坑 溝跡	1基 2棟 2基 2条	土師器、須恵器、 軒平瓦、石製品、 鉄製品、鉄滓	古代の可能性が高い桁行3間（1棟は2間以上）、梁行2間の建物を確認した。建物は約27m離れるが、北側梁行を揃えて配置されている。 また、破片ではあるが軒平瓦が出土したことが特筆できる。		

(北緯、東経は世界測地系による)

栗原市文化財調査報告書第2集

泉沢A遺跡

——農道片子沢線改良工事に伴う発掘調査報告書——

平成18年3月20日 印刷

平成18年3月24日 発行

発行 栗原市教育委員会

〒987-2215 宮城県栗原市築館高田2丁目1-10

TEL 0228-23-2228 FAX 0228-23-2231

印刷 伊藤印刷所

〒989-5301 宮城県栗原市栗駒賀崎上小路68

TEL 0228-45-1206 FAX 0228-45-1242